The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『紅楼夢』脂硯斎批評語「囫圇語」小考
Author(s)	栗原, 順子
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 167-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　號号（総五十六号）平成二十五年六月　一六七―一七九頁

『紅楼夢』脂硯斎批評語「囫圇語」小考

栗原順子

序言

『紅楼夢』研究（以下、紅学）の内、修辞学や文体研究等の分野では本文表現の曖昧性がしばしば指摘され、その文学的効果が論じられており、それらを模糊言語の一つとしている(注1)。中でも会話文に於ける模糊言語は特に囫圇語と称される。「囫圇」は『紅楼夢』本文に付けられた初期の注・脂硯斎批評語（以下、脂評）に見える語である。本来は「はっきりしない。漠然と。総括して。」という意味で、脂評では「訳の分からない。理解し難い。」という意味で使用される。つまり囫圇語は紅学では模糊言語の一種、会話文に於いては同義である。こうした状況から本文の模糊言語と脂評の囫圇語には関連性があると思われる。だが、紅学では本文と評語を分けて論ずる事が多く、従来の研究では模糊言語の本文に於ける芸術性を論じるもの(注2)や脂評に於ける囫圇語の解釈に注目したもの(注3)が中心で、本文と脂評を関連づけて模糊言語を考察するものは少ない。本文の研究では賈宝玉と林黛玉二人の関係に終始し、他の人物への言及に欠ける。又、脂評の研究では「囫圇」と評されている本文の模糊言語が人物形象塑像の面で個性化という効果を挙げている事は指摘されているが、そもそも本文に模糊言語が存在する要因や、人物形象塑像効果に対する作者の意図の有無には触れていない(注4)。本稿では脂評で「囫圇」と評される本文を発生状況毎に分類して考察し、本文と脂評を関連づけて分析する事で、『紅楼夢』に囫圇語を含めた模糊言語が存在する要因と文学的効果を指

摘し、作者の意図に関しても言及したい。

一　『紅楼夢』の直接交際語と間接交際語

中国古典章回小説の多くは、話本と呼ばれる講談の種本や台本の形式を継承しており、物語展開とは別に、作者が作品の叙述文中に出現し、講談師風に物語や登場人物に対する意見を述べたり、読者へ訴えかけたりする語や韻文がある。これらは直接交際語とも呼ばれる。これに対する間接交際語は登場人物同士の交流によって読者に情報を伝達するもので、会話文や独白、心中独白を指す(注5)。

『紅楼夢』に於けるそれぞれの状況を見ると、直接交際語となる作者の介入は極めて少ない。全百二十回中の冒頭部から前半部にかけては、講談師に代わる存在として「石兄」が本文に度々登場する。『紅楼夢』は別名を『石頭記』とも言い、通霊宝玉という石に刻まれた石自らの見聞録であるという設定だ。だが、石が物語を創作出来る筈もなく、執筆しているのは勿論、人間の作者・曹雪芹であり、作者が「石兄」として物語に登場している事になる。しかし、これは回を追う毎に見られなくなる。それには『紅楼夢』には直接交際語介入に代わる評語の存在がある事が影響していると思われる。章回小説には評語が付けられている版がある。各回の前後や本文紙面の余白、行の隙間等に作者とは別の人物が書き込みをしているのだ。評語の内容は多岐に渡り、登場人物や地名の紹介から物語の感想まで様々である。一般にこれらの評語は後世の人物によるもので、幾種類もある。読者は既知の物語であっても評語が付いた版を読む事で再び物語を楽しんだり、批評者の解説や意見によって更に深く物語を理解したりする。『紅楼夢』にもこうした評語が付けられている版があるが、他の章回小説と異なるのは、その評語が作者の執筆と同時に付けられた事だ。この評語は刊行本以降に付けられた後世の評語と区別して脂硯斎批評語と呼ばれる。作者の執筆と同時期に評語を施した人物は複数存在したと思われるが、最も数多くの評語を残したのが脂硯斎と呼ばれる人物である(注6)。その号から初期に付けられた評語を纏めてこの様に称する。これら批評者は未だ特定されていないが、評語には作者の実家・曹家の歴史に関わる内容もあり、作者と密接な関係にあった人物である事は確かだ。彼らは作者が執筆する傍らで評語を付けている。『紅楼夢』の作者は批評者が何を自分の作品に書き込んだのか認識しており、評語の問に答えたり、評語によって本文を変更した

りしていたのである。批評者の脇で執筆していた作者は、他の章回小説で作者が直接交際語として本文に登場して述べていた言葉を、批評者に託したのである。つまり脂評は単に批評者の意見ではなく、作者の意見も反映しているのだ。

一方、『紅楼夢』の間接交際語となる登場人物の会話文には、前述の様に模糊言語が多く見られる。会話文は直接交際語に比べて間接的であるが故に、本来はより分かりやすく読者に情報が提示されるべきで、読者はそこから人物の身分や性格といった人物形象塑像的な要素や物語に於ける役割や状況といった物語展開上の要素、或いは人間関係といった様々な情報を読み取るのである。だが、『紅楼夢』の会話文には時にこうした情報が一読しただけでは明確に伝わってこない箇所が幾つも存在する。それを脂評で「囫圇」と評しているのだ。それは作者の文章表現力を批判する語ではない。脂評は「妙」という賞賛を意味する評語も同時に付けている。文学作品に於いて作者が敢えて模糊言語を使用し、曖昧な表現を創造する事で文学的効果を得る手法は指摘されている所であり(注7)、『紅楼夢』本文に見える模糊言語も単に曖昧な語を指すのではない。語順や語彙選択の過ちといった発話者の言語駆使能力の欠乏によって表現能力が低下した表現は模糊言語には入らない。何らかの目的で故意に言語を操作し、曖昧な表現を作り出したものを言うのだ(注8)。

二　『紅楼夢』本文の模糊言語と脂評の囫圇語

脂評に「囫圇」或いはそれと類似する「不解」「難解」の意味で使用されている評語、及び関連する評語が使用されている会話場面を、発生状況ごとに挙げて考察する。発生状況は以下の三つに分類される(注9)。

(一)　混乱している場面

混乱している場面で人が発する言葉が明確でない事は多々ある。『紅楼夢』でも予想外の事態の発生や興奮のあまり登場人物が心理的に混乱し、「囫圇」と評されている箇所がある。

①【本文】宝玉跺脚道：『還不快跑！』[十九](注10)（宝玉は足ずりしながら、「何をぐずぐずしてるんだ！」というと、）

【評語】此等搜神奪魄，至神至妙処，只在囫圇不解中得。（こうした魂を奪われる様な場面での神業とも言える表現は、囫圇不解にしてこそ得られるものだ。）

②【本文】宝玉道：『……可見他白認得你了。可憐！可憐！』［十九］（「……かわいそうに、あの子はおまえの浮気の相手にされたってわけだね。……」）

【評語】又写宝玉之発言生性，件件令人可笑。不独於世上親見這様的人不曾，即閲今古所有之小説奇伝中，亦未見這様的文字。於顰児処更為甚。其囫圇不解之中実可解，可解之中又説不出理路。……余閲《石頭記》中至奇妙之文，全在宝玉顰児至癡至呆囫圇不解之語中，其詩詞雅謎酒令，奇衣奇食奇玩等類，固他書中未能……。（宝玉の言動で又その性格を描くとは、毎回人を喜ばせる。世間でこの様なのを見た者がいないだけでなく、古今の小説にもこうした文は見た事がない。林黛玉に関しては特にそうだ。その囫圇不解の中に実は解がありながら、その解の中では筋道を言い表せない。……私が『石頭記』の絶妙な文に至ると、全てが賈宝玉と林黛玉の馬鹿げた愚かな囫圇不解な語の場面であり、その詩やら謎やら酒令やら、変わった衣食や遊び等の類は、他の書では見る事が出来ない……。）

①②共に賈宝玉が下僕・茗煙と侍女・卍児の密会現場を押さえた場面。慌てて逃げる卍児に咄嗟にかける賈宝玉の言葉や卍児の年齢さえ知らない茗煙を責める賈宝玉の言葉には、侍女であろうと女児を重んじる賈宝玉の性格が表れている。評語では作者が「囫圇不解」の表現によって巧に賈宝玉や林黛玉の稀有な性格を描いている事、従来の小説には見られなかった手法を作者が用いている事を述べている。

③【本文】李嬷嬷聴了這話，益発気起来了，説道：『……誰不是襲人拿下馬来的。我都知道那些事。……』［二十］（注1）（それがいっそう李ばあやをいきり立たせた。「……どいつもこいつも襲人にたづなを握られていないやつはないじゃありませんか？わたしだってそんなことぐらい知っておりますよ。……」）

【評語】囫圇語，難解。（囫圇語だ。難解だ。）

賈宝玉の乳母・李ばあやが侍女達と喧嘩になり、花襲人に嫌味を言う場面。賈宝玉もなだめに入るが、李ばあやは収まらず、賈宝玉の事実上の妾である花襲人が他の侍女達を牛耳っていると遠回しに皮肉る。事情を知る者には「囫圇」「難解」ではない。

以上の様に当人も意識しないような咄嗟に口に出す言葉にこそ、人物の本性や実際の状況が表現されている。

（二）微妙な恋愛感情を表現する場面

主に賈宝玉と林黛玉の恋愛であるが、第二十六回では侍女・紅玉と賈芸の恋愛にも「囫圇」という評語が見える。

①【本文】黛玉聴了，睜開眼，起身笑道：『真真你就是我命中的「天魔星」！……』［十九］（黛玉はぱっちりと目をあけて、起きあがった。「まあ、あなたったら――いやね。あたしの運命にまといつく妖魔星！……」彼女はそういって、）

【評語】妙語。妙之至，想見其態度。（素晴らしい語だ。非常に素晴らしい。その態度を見てみたい。）

②【本文】一面理鬢笑道：『我有奇香，你有「暖香」没有？』［十九］（黛玉は鬢をかきあげながら、また笑っていった。「あたしがめずらしい香を持ってるとしたら、あなたは暖かい香を持ってらっしゃる？」）

【評語】奇問。一時原難解，……（奇妙な問である。直ぐには理解し難い……）

食後に昼寝を始めた林黛玉を賈宝玉が起こす場面。賈宝玉と金玉縁で結ばれている薛宝釵は「冷香丸」という薬を常飲している。林黛玉は皮肉って「暖香」と言ったのだ。この問は一見、「奇」「難解」であるが、①の林黛玉の台詞は木石縁で結ばれた二人の運命的な縁を感じさせ、賈宝玉、林黛玉、薛宝釵の微妙な関係をこの回まで読んできた読者には「妙」である。

③【本文】宝玉道：『我也為的是我的心。難道你就知你的心，不知我的心不成？』［二十］（「ぼくだってあなたの心を心としたいと思ってるんです。あなたはご自分の心しかおわかりにならないのでしょうか？ぼくの心はわかってくださらないのでしょうか？」）

【評語】此二語不独観者不解，料作者亦未必解；不但作者未必解，想石頭亦不解，不過述宝、林二人之語耳。石頭既未必解，宝、林此刻更自己亦不解，皆随口説出耳。若観者必欲要解，須自揣自身是宝、林之流則洞然可解；若自料不是宝、林之流，則不必求解矣。万不可記此二句不解，錯謗宝、林及石頭作者等人。（この二語は読者が分からないだけでなく、作者も必ずしも分かっていないであろう。作者が必ずしも分かっていないだけでなく、恐らく石も又分かっておらず、賈宝玉と林黛玉の言葉であるというに過ぎない。石が必ずしも分かっていないならば、恐らく賈宝玉や林黛玉も即ち必ずしも分かっておらず、全てたまたま口から出た語というに過ぎない。もし読者がどうしても理解したいならば、自分が賈宝玉や林黛玉であったらと考えれば、理解出来るだろう。もし自分が賈宝玉や林黛玉の様な人物ではないと思うなら、そもそも理解を求める必要はない。この二語を分からないと拘って、賈宝玉と林黛玉、石、作者らを間違って責めたりしては決してならない。）

薛宝釵に嫉妬した林黛玉に賈宝玉が弁解をする場面。

賈宝玉と林黛玉の会話文は「不解」である。だが、こうした文こそが真実の二人の姿を描いているのだ。それを作者が故意に「不解」のまま描いている事が評語から分かる。「石頭」は前述の通霊宝玉を指す。

④【本文】李嬷嬷站住，将手一拍道：『你説説，好好的又看上了那個種樹的什麼雲哥児雨哥児的。……明児上房裏聽見可又是不好。』[二十六]（注12）（李ばあやは立ちどまり、手を打っていった。「さればさ、おまいさんお聞きよ。こんどはあの木を植えてる雲ちゃんとか雨ちゃんとかいうのがすっかりお気に召してね、……いまに正房のお耳に入ってごらん、それこそまた事だわな」）

【評語】奇文神文。囫圇不解語。更不解。（絶妙な神がかった文だ。囫圇不解の語だ。更に分からない。）

⑤【本文】紅玉笑道：『那一個要是知道好歹，就不進来纔是。』[二十六]（「あのかたが物のわかるお人だったら、おいでにならないほうがいいのですがね」）

【評語】是私心語，神妙。更不解。（心中の語である。神妙だ。更に分からない。）

⑥【本文】紅玉道：『……叫他一個人乱碰可是不好呢。』[二十六]（「……あのかたをひとり歩きさせて、滅多なところへぶつからせてごらんなさい、それこそ事でしょ」）

【評語】総是私心語。（全て心に秘めていた想いから出る語である。）

⑦【本文】這裏紅玉剛走至蜂腰橋門前，只見那辺墜児引着賈芸来了。[二十六]（こちらは紅玉、いましも蜂腰橋（きょう）の入口へさしかかったとき、向こうから墜児が賈芸を案内してくるのを認めた。）

【評語】妙。不説紅玉不走，亦不説走，只説剛走到三字，可知紅玉有私心矣。……（素晴らしい。紅玉が行かないと言わず、又行ったとも言わず、丁度行ったところでと言う。紅玉に心に秘めた想いあるのが分かるというものだ。……）

以上、李ばあやが賈芸の様子を紅玉に語る場面。④「什麼雲哥児雨哥児的」は賈芸を指す。彼は紅玉と相思相愛になる。「雲」「雨」は単に「芸」と音が近いというだけでなく、男女関係を暗示する語だ。⑦「蜂腰橋」で重要な事件が発生する事は、大観園完成時の回の脂評で既に預叙（注13）されていた。評語では「囫圇」「不解」という語で読者に思考する猶予を与え、二人の関係を深く印象付けている。二人は賈家没落後に賈宝玉を救う重要人物である。「私心」はここでは賈芸を想う紅玉の心情を指す。紅玉の私心語には賈芸を気遣う心情がよく表れている。一般には「囫圇」「不解」の語であるが、紅玉

の賈芸を想う気持ちを理解出来れば「妙」と感じられよう。微妙な恋愛感情を表現する場面では、読者が本人になりきる事で登場人物を真に理解出来る事を脂評では述べているのだ。

（三）賈宝玉の性格を表現する場面

賈宝玉は当時の男性としては非常に特殊な性格を有していたと言わざるを得ない言動を繰り返している。社会常識や理念に反する彼の言動は他人からは理解し難いものであり、それらも「囫圇」と評されている。その「囫圇」の言動を正すべく設定されているのが花襲人による「花解語」である。ここで共に挙げる。

①【本文】襲人道：『那是我両姨妹子。』宝玉聴了，讃嘆了両声。［十九］（「あれはふたりとも、あたくしの母方の従妹ですわ」宝玉は二度つづけてため息をつき、心から感嘆の声をあげた。）

【評語】這一讃嘆，亦是令人囫圇不解之語，只此便抵過一大篇文字。（この讃嘆は又もや人を囫圇不解にさせる語だが、ここで即ち重要な場面に至るのだ。）

②【本文】襲人道：『嘆什麽？……』［十九］（「あら、何をため息ついていらっしゃいますの？……」）

【評語】只一嘆，便引出花解語一回来。（只一つの溜め息で花解語一回を引き出した。）

③【本文】宝玉笑道：『……没的我們這種濁物倒生在這深堂大院裏。』［十九］（宝玉は笑って「……ぼくのようなつまらぬ人間が、ここに生まれるなんて、まったくまちがっていると思っただけなんだ」）

【評語】這皆宝玉意中確実之念，非前勉強之詞，所以謂今古未有之一人耳。聴其囫圇不解之言，察其幽微感觸之心，審其癡妄委婉之意，皆今古未見之人，亦是未見之文字，……亦囫圇不解。妙甚。（これは全て賈宝玉の心中の真実の思いであり、以前の無理をして言った言葉とは違う。だから今迄にないものだと言うのだ。その囫圇不解の言を聞くとその微妙な感慨の心が察せられ、愚かしい中にも婉曲的な意味が感じられる。全て今まで見られなかった人物のものであり、見られなかった文だ。……又もや囫圇不解だ。非常に素晴らしい。）

以上、花襲人の実家を訪れた賈宝玉が、そこで見かけた赤い服の少女達について帰宅後に花襲人に尋ねる場面。間もなく嫁に行く彼女の従妹だと聞いた賈宝玉は、自分の元でなく、苦労するであろう嫁ぎ先へ行く事を残念がって溜め息を漏らす。賈宝玉は普段から立身出世の為の学問や交際を軽蔑し、侍女や姉妹達と共に過ごしている。少女にも自分と共に楽しく過ごしてほしいのだ。

侍女であるとは言え、花襲人は自分の将来を託す相手である賈宝玉に対し、世間一般の男性同様に生活してくれるよう説得する。それが花解語だ。花解語の「花」は花襲人の姓を指す。この回の囫圇語はこの花解語とセットで設定されていると思われる。評語では作者が「囫圇不解」の語によって賈宝玉という人物の性格を見事に描き、個性化している事を評価している。

④【本文】今見他默默睡去了，知其情有不忍，気已餒墮。［十九］（襲人は、宝玉がむっつりとして寝ている様子から、自分にああいわれたために、たまらない気持になって、がっくり気落ちしたのだと見て取った。）

【評語】不独解語，亦且有智。（解語だけでなく、智もある。）

⑤【本文】襲人道：『……不任意不任情的就是了。』［十九］（「……ただなにごとでも、もっとおつつしみになって、勝手気ままになさらないように。」）

【評語】総包括尽矣。其所謂花解語者大矣，不獨冗冗為児女之分也。（全てはこれに尽きる。花解語のまとめだ。単なる冗漫な女児の立場ではない。）

⑥【本文】襲人冷笑道：『……縱坐了，也没甚趣。』［十九］（襲人は冷やかにせせら笑って、「……乗れたとしたところで、うれしいとも思いませんわ」）

【評語】調侃不浅，然在襲人能作是語，実可愛可敬可服之至，所謂花解語也。花解語一段，乃襲卿満心満意将玉兄為終身得靠，千妥万當，故如是。……（嘲笑したものである。しかし襲人がこの様に言うのは実に可愛く敬服すべきところであり、所謂、花解語である。花解語の一段は、花襲人が心から賈宝玉を自分の一生を託す相手と思ってした事ばかりで、理にかなう。……）

以上、花襲人が花解語を語る場面。実家へ帰ると嘘をついて賈宝玉の気を引いたり（④）、留まる条件を出して賈宝玉の生活態度を改めさせようとするが、賈宝玉が語るのは自分が灰になって散り散りに飛ばされるまで待ってくれ等という奇妙な話ばかりだ。⑥でも自分の所に留まってくれれば花嫁の「八人轎」（八人舁（か）きの玉の轎（かご））に乗せると賈宝玉は言うが、侍女の花襲人が正妻を迎える時にのみ使用する「八人轎」に乗るは無理なのだ。賈宝玉の囫圇語を解こうと花解語を重ねた花襲人であったが、徒労に終わる。

⑦【本文】襲人冷笑道：『要為這些事生気，這屋裏一刻還站不得了。……』［二十］（すると襲人は冷やかに笑った。「これぐらいのことで腹を立てていましたら、このお部屋には一刻もいられやしませんものね。……」）

【評語】実言，非謬語。従狐媚子等語来，実実好語，

的是襲卿。（本当の話だ。でたらめな理屈ではない。女狐等の言葉以降は実に好い。確かに花襲人だ。）

（一）③で李ばあやに悔しい思いをさせられた花襲人を賈宝玉が慰める場面。評語「狐媚子」は男を誘惑する悪女を指す語で、李ばあやが侍女達を罵って言った言葉。花襲人は嫌味たっぷりに賈宝玉へ言い返す。

⑧【本文】襲人道：『你心裏不明白，還等我説呢？』［二十一］（注14）（「ご自分でおわかりにならないからって、あたくしに言えとおっしゃるんでございますか？」）

【評語】石頭記毎用囫圇語処，無不精絶，且不相犯。……這亦是囫圇語，卻従有生以来肺腑中出，千斤重。（石頭記は囫圇語の箇所に至れば素晴らしくないところはない。しかも相反していない。……これもまた囫圇語だが、真心から出たのであり、重みがある。）

⑨【本文】襲人道：『……比不得你，拿着我的話当耳旁風，夜裏説了，早起就忘了。』［二十一］（「……あなたさまのように、人のいうことを馬の耳に風と聞きながし、夜中に言ったことをあくる朝には忘れてしまうお方とはちがいます」）

【評語】這方是正文，直勾起花解語一回文字。（これこそ正しい文だ。花解語の回の文とそのまま繋がる。）

一向に生活態度を改めない賈宝玉に対し、花襲人が嫌味を言う場面。花襲人の花解語が賈宝玉の囫圇語の対照として存在する事で、賈宝玉が発する囫圇語を際立たせている。又、花解語は彼女の人物形象塑像の面で個性化を成功させており、評語でも彼女の言葉が「襲卿」（花襲人）らしいものである事を述べている。

三　模糊言語の存在要因と文学的効果

以上、脂評囫圇語出現箇所及び関連箇所を、混乱している場面、微妙な恋愛感情を表現する場面、賈宝玉の性格を表現する場面に分けて本文と共に挙げ、考察した。その結果として、以下の数点を指摘したい。

（一）存在要因

先ずは封建時代という時代背景である。当時、恋愛感情を直接的に文字で表現する事は憚られた筈だ。特に作者が育った様な貴族家庭で未婚男女の自由恋愛は有り得ない事であった。既婚男女に関しては、『紅楼夢』にも賈璉の浮気場面（第二十一回）等、所謂淫書の様な男女関係の描写もある。だが、賈宝玉と林黛玉の恋愛形態にこうした描写は当てはまらない。未婚の恋愛過程にある男女の微妙な感情を描こうと思えば、当時出来得る表

現、そして現実に即した言動として、曖昧な表現が存在するのはやむを得ないのではないだろうか。前述の第十九回で「難解」と評されている賈宝玉と林黛玉の会話場面は、賈宝玉が林黛玉の寝室を訪れる場面だ。同回脂評は他の書なら「醜態邪言」を描くところだが、賈宝玉はそうならないと述べている。実際、賈宝玉に下心など一切なく、食事直後の昼寝は良くないと心から林黛玉を心配していたのだ。当時の一般的観念と賈宝玉の性格の特殊性を述べる評語である。

もう一つは作者が文学的表現効果を意図した事である。作者は本文で非常に綿密な人物形象塑像作業を行っている。情節(注15)や会話を連ねて人物の性格を確実に読者に印象づけていく。「囫圇」と評される場面では、賈宝玉の一般的には理解され難い言動を描き、彼のみならず、林黛玉や花襲人の個性化にも成功している。これが意図的に行われている事は前述の評語で述べられている通りだ。「囫圇」と評される賈宝玉の言動は当時の社会では受け入れられ難いものだ。だが、『紅楼夢』に於ける賈宝玉は太虚幻境の神瑛侍者、大観園の女性達は仙女の生まれ変わりである。彼らは死後に太虚幻境へ戻る。こうした現実離れした設定が、賈宝玉という一般的には「囫圇不解」とされる人物が作品に登場する背景にある。第二十回脂評で賈宝玉の性格を「又用諱人語瞞着看官。」(又人の忌む言葉で読者を騙している。)と述べているのは、作者が賈宝玉という人物に意図的に現実離れした性格を与えている事を述べているのではなかろうか。

作者の文学的意図として更に指摘したいのは、模糊言語の使用により表現を曖昧にする事で、読者に自ら想像する事を促すというものである。「囫圇不解」と感じる事で自ら登場人物の心理を読み取ろうとする姿勢、物語展開を予想しようとする姿勢を読者に促そうとしたのではないだろうか。作者は読者が想像する手掛かりを預叙という形で本文や評語の至る所に残している。これは作者の目指した従来の小説には見られない表現法であろう。これが意図的である事は脂評に示されている。第一回脂評には「這正是作者用画家煙雲模糊処，観者万不可被作者瞞了去，方是巨眼。」(これは正に作者が画家の煙雲で曖昧にぼかす手法を用いているのだ、読者は決して作者に騙されてはならない、それでこそ目利きというものだ。)とある。作者には画家としての才能もあった。輪郭をはっきりと示すより敢えて曖昧にしたり、絵の一部をぼかしたりする事で、見る者は自らそこに形を見出そうとする。作者はそうした鑑賞者の心理を利用しようとしたのではなかろうか。

（二）文学的効果

では、（一）で指摘した存在要因から『紅楼夢』に存在している模糊言語、特に会話文に於ける囫圇語は、『紅楼夢』で如何なる役割を果たしているのであろうか。

小説の会話文は人物や物語展開に関する情報を読者へ伝達する重要な文章だ。作者が読者にこれらの情報を確実且つ正確に伝えようとするならば、会話文の言葉や表現は明確であるのが望ましい。だが、現実に日々交わされる会話は常に正確で明瞭なものであろうか。例えば人が慌てふためいている時や緊迫した場面では、その言動が曖昧になってもおかしくない。寧ろ理路整然としている方が不自然である。又、恋愛感情を表現する場合、当時の実際の社会環境に即した言動をそのまま描けば、文章表現は自ずと曖昧になる筈だ。『紅楼夢』では、こうした状況をありのまま描く事で、現実に近い人物を描く事に成功している。現実的な描写は、読者に自らの経験を思い起こさせたであろう。読者は登場人物に親近感を覚え、共感し、登場人物と物語に展開される空間を共有する事が出来る。

又、作者は曖昧な会話文を設定する事で、読者に多くの思索と想像の余地を与えている。読者の想像力を刺激し、読者が自らの感覚や知識や経験によって曖昧な部分に隠された人物の感情や物語の展開を導き出すよう促すのだ。読者はこうして作品に没頭し、自分が作品に参加している気分になっていく筈だ。作者はその指標として脂評に「囫圇」や「不解」といった語を残し、読者が想像する手助けとして様々な預叙を本文や評語に残している。読者はただ先にある文字を読んで物語の展開を知るだけでなく、本文や評語にある預叙から物語展開を予想し、実際の物語展開と比較して楽しむ事が出来るのだ。『紅楼夢』は読者参加型という新しい閲読方法を読者に与えたと言えるのではないだろうか。

結語

以上、『紅楼夢』本文に於ける模糊言語を脂評に現れる囫圇語と関連づけて考察した。本文に存在する模糊言語を評語から分析するという方法は『紅楼夢』だからこそ可能なものであり、『紅楼夢』に於ける脂評の重要性を示すものである。脂評は作者の創作背景を探る資料である。脂評を本文研究と関連づける事で作者の思想を含めたより深い分析が可能になるのではないだろうか。本稿では、脂評で「囫圇」と評される場面では作者が意図的に模糊言語を使用し、現実的人物描写と模糊言語に

よって読者参加型の姿勢を促す効果をあげている事を指摘した。読者が物語展開を想像する手掛かりとして預叙という手法が使用されている可能性の考察を、模糊言語と預叙の関連研究として今後の課題としたい。

注

（1）瀋蘆旭『修辞学散論』（黒竜江人民出版社、二〇〇四年）、李慶信『紅楼夢叙事論稿』（社会科学文献出版社、二〇一一年）等。『修辞学散論』では模糊言語を「意義が不明確、表現が不明瞭で解釈の範囲が広く、可変性が大きい社会交際で使用される語」とする。瀋氏は文学に於ける模糊言語の例として『紅楼夢』中の文章を挙げ、それらを芸術性模糊言語としている。

（2）滕雲「《紅楼夢》文学語言論」（『紅楼夢学刊』総第七輯、一九八一年）、孫愛玲『語用与意図――《紅楼夢》対話研究』（北京大学出版社、二〇〇一年）等。

（3）王慧「評脂硯斎的叙事理論」（『紅楼夢学刊』総第九十一輯、二〇〇一年）等。

（4）陳維昭『紅学通史』（上海人民出版社、二〇〇五年）。

（5）曹煒『『金瓶梅』文学言語研究』（暨南大学出版社、二〇〇四年）に基づく。独白の解釈に関しては、李治翰「論《紅楼夢》的独白与内心独白」（『紅楼夢学刊』総第七十二輯、一九九七年）を参考にした。

（6）脂硯斎の他、畸笏（叟）、棠村、梅渓、松斎等の署名が見える。孫遜『紅楼夢脂評初探』（上海古籍出版社、一九八一年）。

（7）『修辞学散論』（前出）。

（8）劉佳・樊慶彦「一切妙在〝不解〟中――語言学視覚下的《紅楼夢》脂評〝囫圇語〟解読」（『紅楼夢学刊』総第百四十八輯、二〇一二年）。

（9）分類に関しては陳洪『《紅楼夢》脂評中〝囫圇語〟説的理論意義」（『天津社会科学』第十六輯、一九八四年）を参考にした。本稿では分類項目に賈宝玉と林黛玉以外の人物の言動も含め、より総合的なものとした。

（10）［　］は登場回。本文原文・評語は曹雪芹著・馮其庸重校評批『紅楼夢』（遼寧人民出版社、二〇〇五年）を基本に、兪平伯輯『脂硯斎紅楼夢輯評』（上海文芸聯合出版社、一九五五年）を随時参照している。（　）内は日本語訳。本文訳は、曹雪芹著・松枝茂夫訳『紅楼夢』（岩波書店、一九七九年）。評語訳は筆者。「……」は略を表す。以下同。第十九回回目は「情切切良宵花解語　意綿綿静日玉生香」（情切々として良宵　花は語を解し　意綿々として静日　玉は香を生ず）。

（11）第二十回回目は「王熙鳳正言弾嫉意　林黛玉俏語謔嬌音」（王熙鳳　正言もて嫉意を挫き　林黛玉　俏語もて嬌音を謔（からか）う）。

（12）第二十六回回目は「蜂腰橋設言伝心事　瀟湘館春困発幽情」

（蜂腰橋にて言を設けて心事を伝え　瀟湘館にて春に困（つか）れて幽情を発す）。

（13）第十七・十八回脂評に「則曰蜂腰板橋都施之得宜」とある。『紅楼夢』の脂評には後の回で発生する事件や人物の展開を暗示する評語がある。評語の他、回目及び本文に登場する詩文や情節、名称も含め、暗示性を含む表現を預叙という。預叙に関しては、拙稿「『紅楼夢』の預叙」（『人間科学研究』第八号、二〇一一年、日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要）に詳しい。

（14）第二十一回回目は「賢襲人嬌嗔箴宝玉　俏平児軟語救賈璉」（賢き襲人　嬌嗔もて宝玉を諫め　俏（かおよ）き平児　軟語もて賈璉を救う）。

（15）宮中製花簪を宋ばあやが各部屋に配って歩く場面（第七回）、海棠が季節外れに花を咲かせた場面（第九十四回）等では、多くの人物を同時に登場させ、各々が同じ事件に対してどの様に対応し、発言するのかを書き分け、読者に人物を比較させる事で、それぞれの人物の性格や境遇を印象づけている。